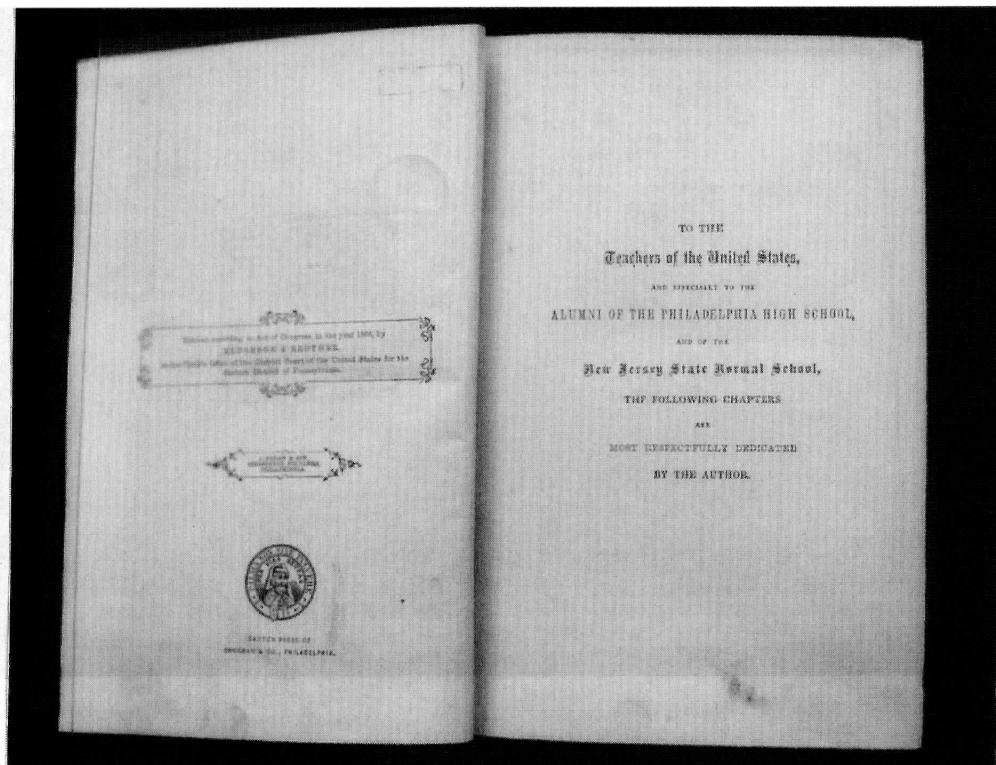
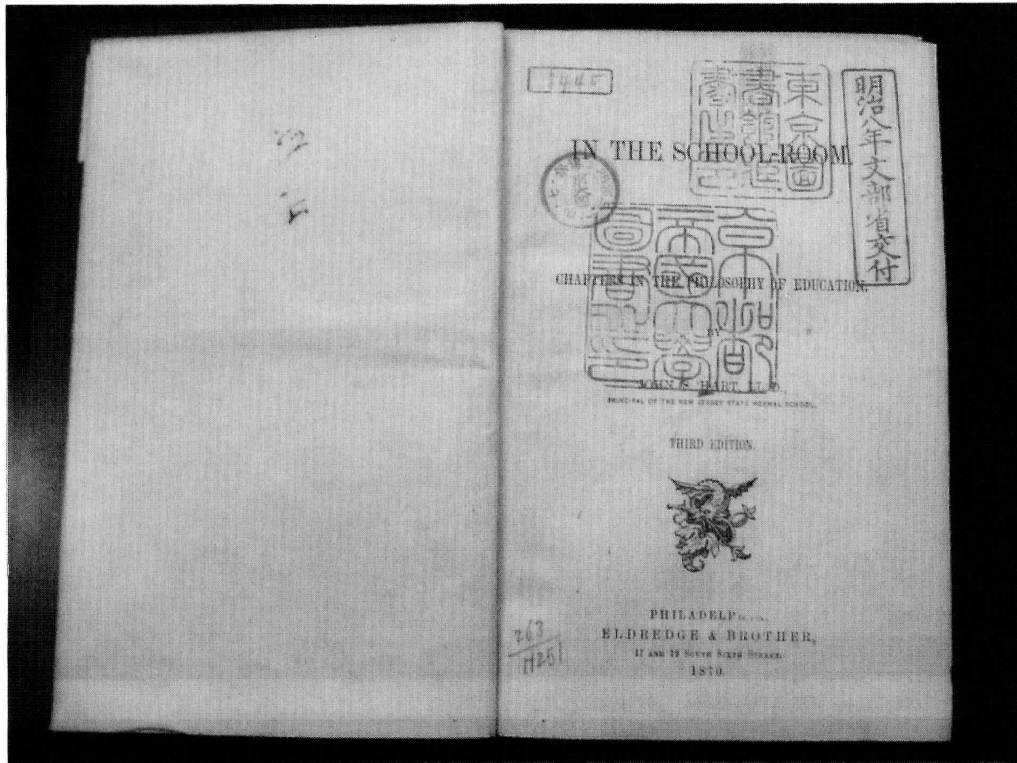
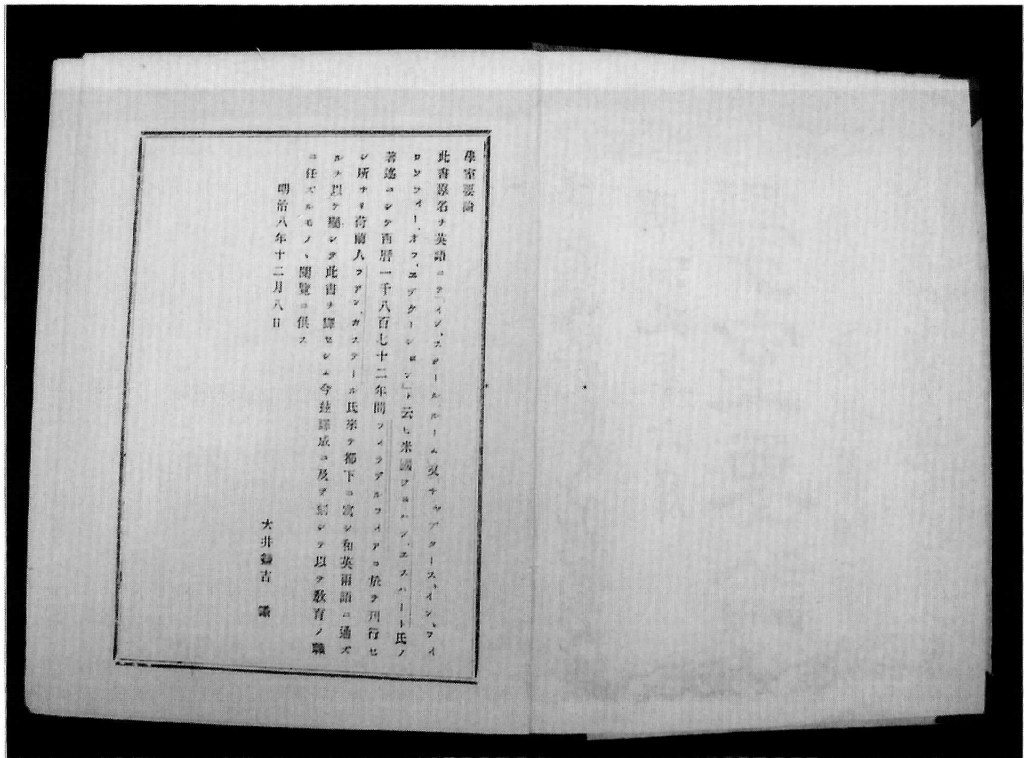


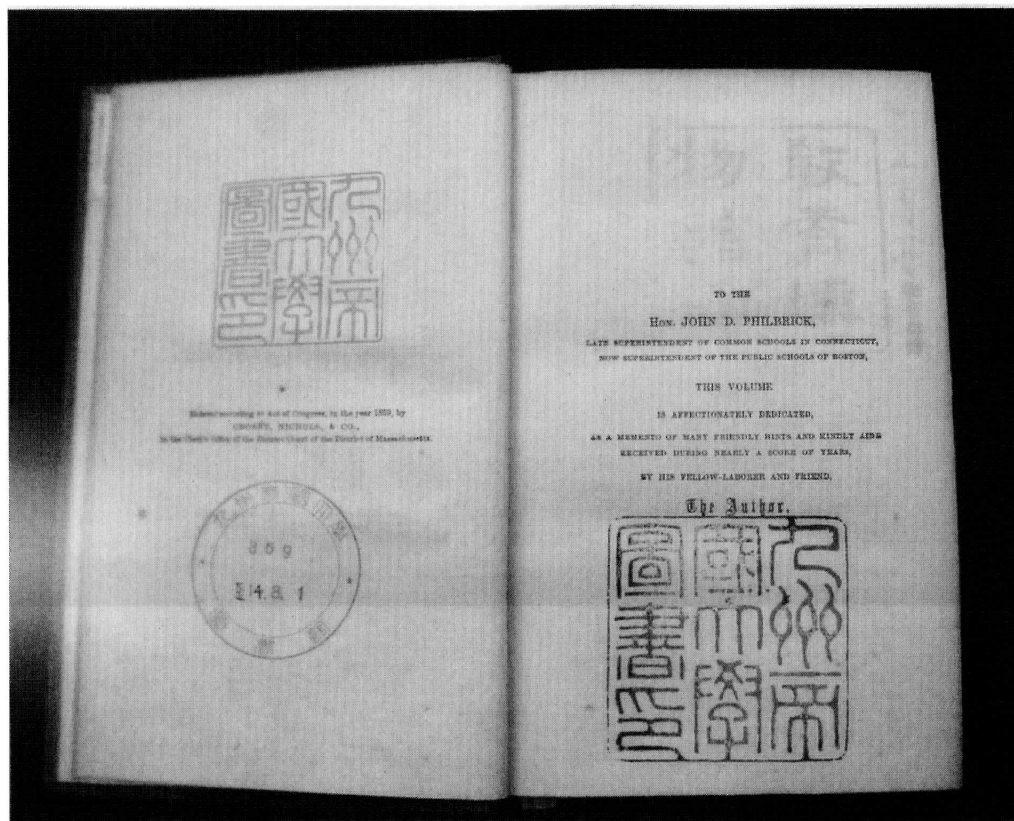
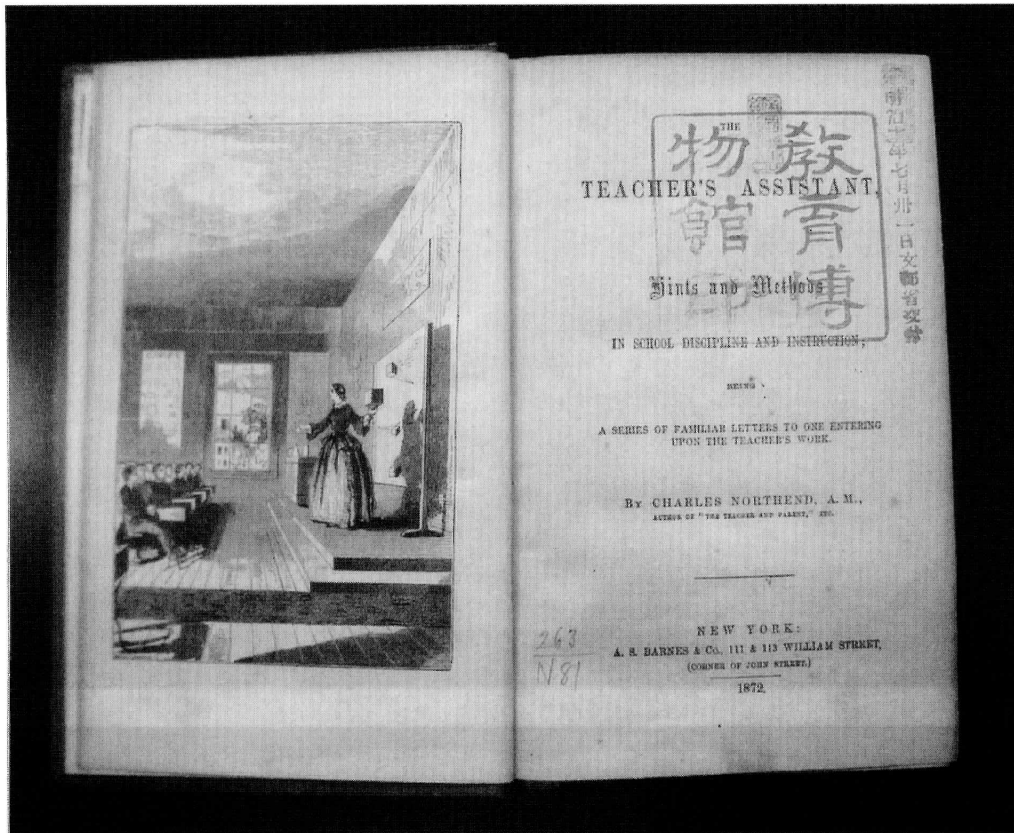
【小林虎三郎校訂、ファン・カステール訳『学室要論』の原書

"IN THE SCHOOL ROOM-CHAPTERS IN THE PHILOSOPHY OF EDUCATION", 1872】

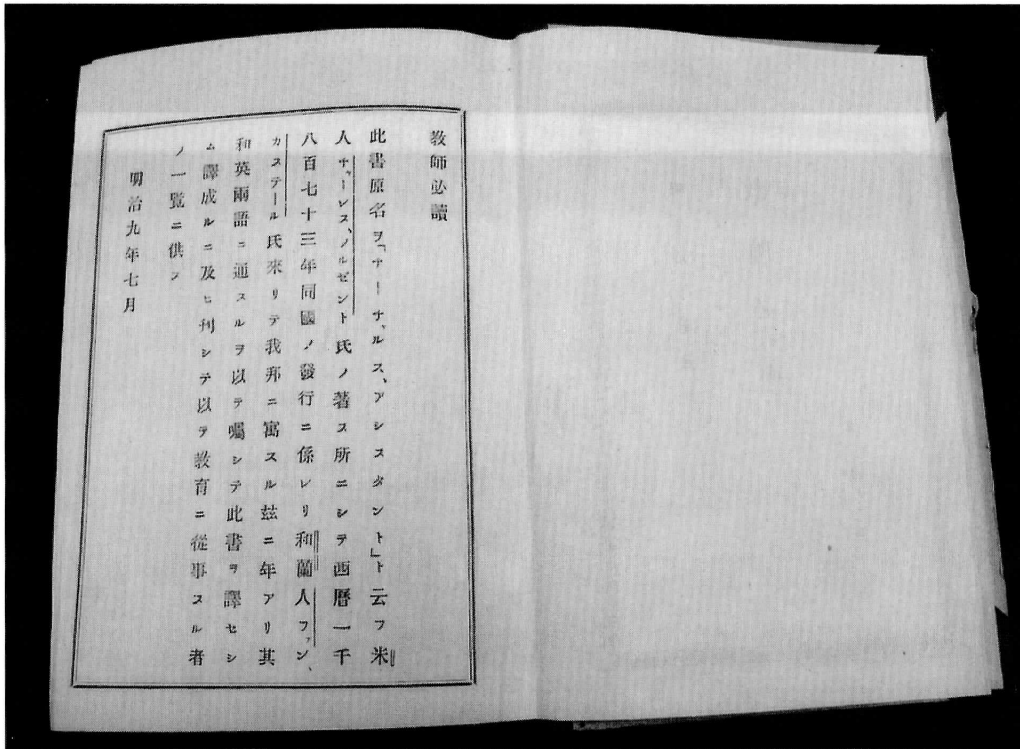
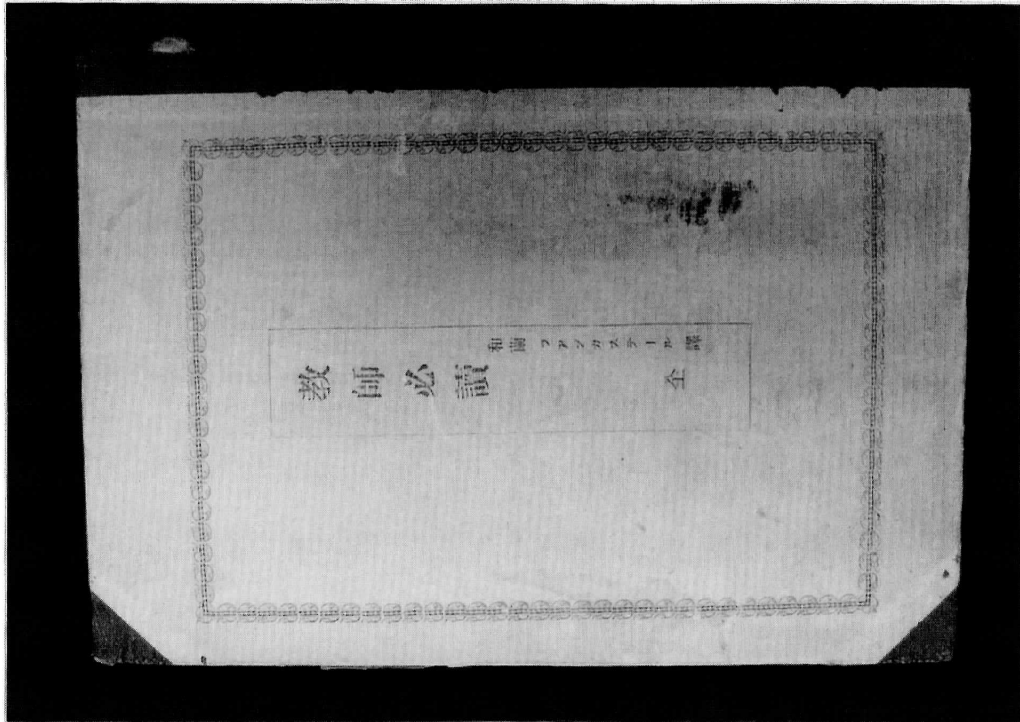




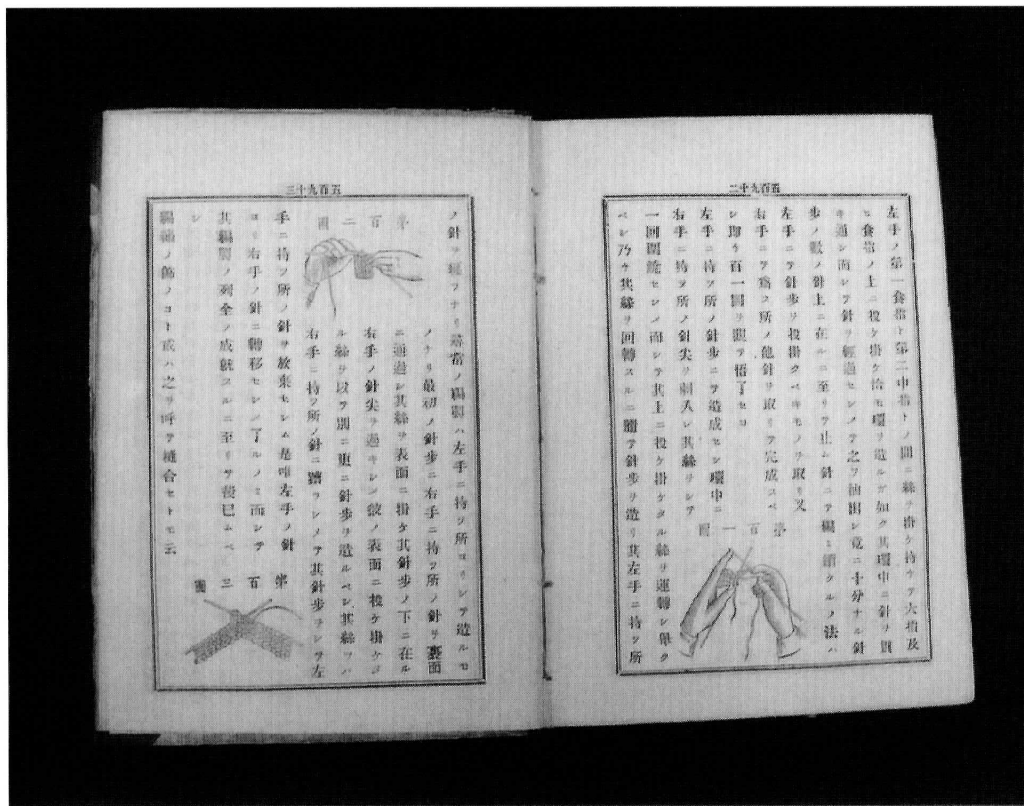
【小林虎三郎校訂、ファン・カステール訳『教師必読』の原書
 "THE TEACHER'S ASSISTANT", 1873】



【小林虎三郎校訂、ファン・カステール翻訳『教師必読』】



【小林虎三郎校訂、ファン・カステール翻訳『童女笠』】



明治初期における欧米翻訳教育書の校訂活動

— 日本近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡(Ⅱ) —

信州大学 坂本保富

はじめに

安政元年以来の長い謹慎生活から解放され、戊辰戦争の後、晴れて長岡藩政の表舞台に躍り出た虎三郎（1827－1877）は、戦火で焼土と化した郷土長岡の復興に東奔西走する。だが、明治4年（1871）7月の廃藩置県により、徳川家康直系の譜代大名であった牧野家長岡藩は消滅した。戊辰戦争で賊軍となった長岡藩は、長岡県にはなれず、柏崎県の一部に編入されたのである。徳川幕府の開幕以来、270年余りに亘って存続してきた牧野家長岡藩の消滅を契機に、彼は、あたかも忠誠と奉公の対象を喪失したかのごとくに、復興途上の郷里長岡と決別し、急遽、上京した。これまでの先行研究における虎三郎の理解では、彼の人生は、戊辰戦後の大参事時代に、長岡復興の根本政策として彼が断行した歴史的な美談「米百俵」に象徴される、教育立国主義に基づく学校建設を絶頂期と捉え、その後の上京後における諸活動は、いわば彼の末期の残り火の活動として、断片的に触れられるのが一般的であった。しかしながら、郷里長岡を辞した後の、東京在住の時代こそが、10年に満たない短期間ではあったが、彼の生涯における学究的活動の全盛期であり、日本の教育近代化に関わる幾つもの画期的な業績を遺した時期であった。実は、その功績の一つが、文部省が刊行した欧米翻訳教育書の校訂活動であった。それは、彼が、文部省の囑託を受けて引き受けた活動であった。この重要な歴史的意味をもつ彼の校訂活動は、これまでの先行研究では、全く看過されてきたのである⁽¹⁾。

維新政府の文部省は、教育近代化の根幹として、欧米モデルの学校教育制度を明治5年（1872）に発足させた。学制の発布である。だが、日本の近代学校は、

教師、教科書、指導法など、全ての面で幕末以来の旧態依然とした実態にあった。特に富国強兵・殖産興業の成否を左右する人的基礎として、維新政府が標榜した国民皆学を旨とする新制小学校の教育は、教師も教材も教授法も、いまだ従前の寺子屋教育の延長上にあった。それ故に文部省は、欧米先進諸国の学校教育に関する知識技術を、急ぎ日本の教育界に普及浸透させるべく、御雇い外国人教師たちに欧米先進諸国の教育関係書を翻訳させて刊行したのである。だが、その際の問題は、例え在日期間が長く、如何に日本語に精通していたとはいえ、所詮、彼等外国人の翻訳した日本語をそのまま出版するわけにはいかず、漢学に造詣が深く日本語に秀でた日本人の学者文化人に、日本語訳文の校訂を依頼しなければならなかったことである。そのような文部省の意向を受けて、校訂を委嘱された最初の人物が、「米百俵」の主人公である小林虎三郎であった。虎三郎は、管見の限りでは、明治初期の最も早い時期に文部省刊行の3冊の翻訳欧米教育書の日本語校訂を担当している。この校訂活動に先立って、明治4年（1871）の8月に上京した後の虎三郎は、早くも同6年4月には全12巻という大部の歴史教科書『小学国史』を刊行し、健在ぶりを内外に印象づけた。さらに翌7年には、中国在留のドイツ人宣教師が執筆した漢書『大徳国学校論略』（上下2冊）に訓点を施して翻刻し、ドイツを中心とした西洋先進諸国の学校教育文化を、西洋モデルの近代化を急ぐ日本社会に広く紹介したのである。

思えば虎三郎は、明治4年に上京するや否や、旧知の維新政府関係者から、文部省の博士職への任官を要請されたのである。だが、当時、維新政府に出仕していた象門後輩の北沢正誠（^{またざわまさなり}1840-1901）の証言「朝廷其の能を知り、将に之を擢用せんとすれども、病を移へて出でず^{てきよう}（²）」、あるいは虎三郎の遺稿集『求志洞遺稿』を編纂刊行した甥の小金井権三郎の記述「朝廷、翁を^め徴して、文部省の博士に挙ぐ。翁、病を以てこれを辞す。蓋し朝臣中翁を知る者ありて、之を^{せんきよ}薦挙すればなり。（³）」とあるがごとく、彼は病気を理由に、維新政府への出仕を辞退していたのである。

当時の維新政府には、実弟の雄七郎（従六位、工部省工学寮権助）が在任していたが、象山塾で同門の勝安芳（海舟、正四位、正院参議兼海軍卿）、津田真道（陸軍省、従五位、四等出仕）、北沢正誠（正七位、左院五等議官）、武田成章（陸軍大佐、従五位、大教授）、大島貞恭（正院、正七位、陸軍少佐、少教授）、子安峻（外

務省、正六位、少丞)、蟻川直方(賢之助、兵部省、権大丞)、渡辺驥^{すずむ}(司法省、従五位、大丞)など、同門旧知の錚錚たる面々が幾人も任官していた。特に文部省には、象門の後輩で昵懇の西村茂樹(従七位、五等出仕、文部大丞、文部大書記官などを歴任)、加藤弘之(弘蔵、従五位、宮内省四等出仕、明治初期に大学大丞、文部大丞を歴任、後に東京大学総理)、小松彰(鉄五郎、大学大丞、大訳官、文書権正)などがいた⁽⁴⁾。彼等にとっては、恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」思想に基づく東西両洋の学問を、最も誠実に学び取った虎三郎の学識が、如何に深く広いものであるかは周知の事実であり、それ故に彼の存在は畏敬の対象ですらあった。

ペリー来航時に処罰を受けて長岡に帰郷して以来、10数年ぶりに再度、江戸改め東京と改称された首都に上った虎三郎が、病軀に鞭打って精力的に展開した国家的レベルでの教育近代化に関わる学術的活動が、前述の象山塾同門の文部省関係者に注目されたことは間違いない。上京後の虎三郎が展開した一連の顕著な学術活動を評価していた文部省は、省内旧知の人物を介して、彼に外国人が翻訳した欧米教育書の日本語訳文の校訂を依頼したものと思われる。その結果、明治9年には、彼が校訂した欧米の翻訳教育書が3冊、矢継ぎ早に文部省から刊行されるに至ったのである。

虎三郎が最初に校訂した翻訳教育書は、明治9年(1876)の6月、文部省から刊行された『学室要論』(“IN THE SCHOOL ROOM”、または“CHAPTERS IN THE PHILOSOPHY OF EDUCATION”,1872)というアメリカの教師用指導書であった⁽⁵⁾。そして、同年7月には、同じくアメリカの教育書『教師必読』(“THE TEACHERS'S ASSISTANT”,1873)とイギリスの女児教育書『童女筌』^{どうじょせん}(全2巻、“GIRLS OWN BOOK OF AMUSEMENT”,1873)の2冊が、虎三郎の校訂を経て相次いで刊行されたのである。それら3冊の英文原書を日本語に翻訳したのは、在日オランダ人のファン・カステール^{アブラハム・ディリリー・ファン・カステール}(ABRAHAM THIERRY VAN CASTEEL,1843-1878)という維新政府の御雇い外国人教師であった⁽⁶⁾。

第一節 翻訳者ファン・カステールの履歴と業績

はたして、オランダ人のファン・カステールは、いつ来日したのか。その時期

は明らかでない。明治2年（1869）には、すでに来日して商業活動を展開していたことは間違いないが、間もなくして彼は、商売上のトラブルで破産宣告を受ける身となった⁽⁷⁾。だが、明治3年には、維新政府の兵部省に御雇い外国人教師として雇用され、英語を教える語学教師に転身したのである。さらに廃藩置県の直前の明治4年（1871）5月には、九州豊津藩（小倉藩）の藩立洋学校の語学教師に迎えられ、英語、仏語、独語などを教えた。そして廃藩置県の後の明治6年11月には、再度、上京して都内の私立学校の語学教師となり、何校かを歴任した。だが、明治11年（1878）11月には病没してしまった。彼は、来日後、母国のオランダには一度も帰国することなく、東洋の異国日本で、35年の短い生涯を閉じたのである。

ファン・カステールが、文部省の委嘱を受けて欧米教育書の日本語訳を行ったのは、死期迫る最晩年の東京時代で、私立学校の語学教師を遍歴していた時期に当たる。何故に彼が、文部省から欧米教育書の翻訳者に抜擢されたのか。彼は、母国語であるオランダ語の他に、英語、仏語、独語、そして日本語を修得していた。はたして彼の日本語リテラシー（読み書き能力）が、どの程度のものであったのかは不明である。だが、欧米文化の翻訳移入を急ぐ明治初期の日本において、英語と日本語の両方に精通していた彼は、極めて希少価値のある存在であった。その語学力を文部省の関係者に見込まれ、彼は欧米教育書の日本語訳を委嘱されたものと思われる。彼が日本語に翻訳したアメリカの教育書（『学室要論』及び『教師必読』）の巻頭に掲げられた文部省の刊行挨拶文には、「和蘭人ファン・カステール氏、来リテ我邦ニ寓スル茲ニ二年アリ。其和英兩語ニ通スルヲ以テ嘱シテ此書ヲ訳セシム⁽⁸⁾」と記されていた。

かくして英文のアメリカ教育書が、オランダ人のファン・カステールによって日本語に翻訳され、その日本語訳の校訂を、文部省は、教育のわかる日本の知識人に依頼したのである。その人物こそが、「米百俵」の主人公、小林虎三郎であった。

明治前期の教育界、特に国民皆学の実現を担う小学教育の世界には、従前の寺子屋教育を脱皮して、欧米日新の近代的な教授法や教材の導入が求められた。そのためには、近代学校に相応しい近代教育学の知識や技術が、学校で児童の教育に当たる教師たちには、是非とも必要であった。それ故に文部省は、欧米教育書を日本語に翻訳して刊行し、教育界に広く普及させようとしたわけである。

欧米先進諸国の教育書とはいっても、明治の半ば頃までは、日本に翻訳紹介されるべきものは圧倒的にアメリカの教育書であった。その先駆を切って翻訳紹介されたのが、ファン・カステール訳の『学室要論』（明治9年6月）、『教師必読』（明治9年7月）、そして『彼日氏教授論』（明治9年7月）であった。これら3冊の内、前2冊は、虎三郎の校訂になるものであった。すなわち、ファン・カステールと虎三郎とのコンビでもって、いまだ教育近代化の端緒にあった明治初期の教育界に、アメリカ教育書が矢継ぎ早に提供され、最新の教育情報がもたらされたのである。この厳粛な事実のもつ歴史的な意義を看過することはできない。

後述するように、決して教育の専門家ではなかった彼等の手がけた翻訳や校訂の仕方、あるいは翻訳・校訂した日本語には、幾つもの問題点が認められた。しかしながら、結果的には、欧米の教育新知識を導入し、それを契機として日本教育の近代化を推進する上で、彼等が担った翻訳・校訂という活動は、実に先駆的な役割をはたすことになった。しかも、ファン・カステールと虎三郎という翻訳・校訂のコンビは、アメリカ物ばかりでなく、同時期にイギリスの教育書『童女筈』（明治9年7月）も翻訳・校訂し、文部省より刊行していたのである⁽⁹⁾。

これまでの教育史研究においては、翻訳者である御雇い外国人教師としてのファン・カステールは、それなりに注目され評価されてきた。だが、彼の翻訳した日本語を校訂した虎三郎の方は、全く看過されてきたのである⁽¹⁰⁾。それでは、彼等が翻訳し校訂した欧米教育書とは、一体、どのような内容と性格を有する書物であったのか。

第二節 虎三郎校訂、アメリカ教育書『学室要論』の内容と特徴

日本で『学室要論』という表題で翻訳刊行された本書は、アメリカ人のジョン・エス・ハート（JOHN.S.HART）の執筆した教育書（“IN THE SCHOOL ROOM”、または“CHAPTERS IN THE PHILOSOPHY OF EDUCATION”）であった。英文原書は、1872年（明治5年）にアメリカのフィラデルフィアで出版されたものであるが、早くも、その4年後の明治9年6月には、同書の翻訳書が日本で刊行されたのである。日本語への翻訳作業は、すでに刊行の前年には終了していたようで、同書の見

開きには刊行元である文部省による次のような発刊文が記載されていた⁽¹¹⁾。

学室要論

コノ書原名ヲ英語ニテ「イン、スクール、ルーム」又「チャプタース、イン、フィロソフィー、オフ、エヅケーション」ト云ヒ、米国ジョハン、エス、ハート氏ノ著述ニシテ、西曆一千八百七十二年間フィラデルフィアニ於テ刊行セシ所ナリ。和蘭人ファン・カステール氏、来テ都下に寓シ、和英両語ニ通ズルヲ以テ、囑シテ此書ヲ訳セシム。今ココニ訳成ニ及デ、刻シテ以テ教育ノ職ニ任ズルモノ、閲覽ニ供ス。

明治八年十二月八日

大井鎌吉 識

日本に翻訳紹介された『学室要論』には、上記のような文部省の刊行挨拶が続いて、原著者であるアメリカ人ハートの次のような序文が収載されていた。そこには、彼が同書を執筆するに至った動機や意図、あるいは自身の経歴などが記されている

⁽¹²⁾。

学室要論原序

コノ書ニ記スル所ハ、コレヲ他ノ学業ニ比レバ遅緩ニシテ、少シク異ナル意見ヲ実地経験ヨリ得タル者ナリ。此ノ経験ハ、コレヲ五千余人ノ男子ト一千人ノ女子トニ就キテ、其ノ多ク教師トナルベキ者ノ教育ヨリ生シタル所ニシテ、皆学校、寄宿学校、坊間中学、国立師範学校ニ於キテ施行セシ者ナリ。余、親ク生徒ノ地位ニ居ヲ、此学業ノ遅緩ニシテ異ナル意見ヲ實際ニ試ミタルコト久シ。今、コノ書ヲ著スノ主意ハ、余ガ自ラ学ビタル者ヲ以テ、子弟ニ授クルニ、勉メテ簡明ニスルニ在リ。故ニ端ヲ教ハ何ソヤノ問題ニ発キ、更ニ教育ハ何ゾヤト云フ広キ問題ヲ以テ卷ヲ終リ、学業ノ師タル者ノ真ニ講究スベキ諸件ヲ条陳セルコト、書中ノ意見ハ、余ガ曾テ教授シ監督シ、及他人ヨリ受クル教ヲ訓導スルコト等ニ従事セシ。其間ニ得タル者ヲ、今極メテ多クハ短ク章ヲ別チテコレヲ述ブ。每章^{もとより}固^も首尾ノ完キコトヲ主トセリ。カクノ如キ著作ハ、浮華^{ふか}ヲ以テ人ヲ悦バシムルコト能ハズト雖、益ヲ實際ニ得タルコトヲ貴フ者、^{いやしくも}苟^も此ニ取ル所アラバ、^{おのずと}自^も其ノ利無キニ非サルヘシ。

観ル者、若^{もし}本書一部ヲ通覽スルノ暇ナキコトヲ苦マバ、唯五六葉ニシテ意義
周^{しゅうぜん}全ナル章ヲ撰ヒ、コレヲ読ムモ亦可ナリ。コノ書題目、各異ナリト雖、文
義支離セズ、終篇皆教育ノ理ニ根拠シテ貫クニ、一線ヲ以テセザル所無ケレ
ハ、人々宜ク殊に意ヲ注スベキナリ。

原著者のハートは、アメリカの教員養成系の諸学校で、長らく教師教育に従事し
た人物であった。その豊かな教育実践の経験を踏まえて、「實際ニ試ミタルコト」
をまとめたのが本書『学室要論』であった。英文原書の見開きには「TO THE
TEACHERS OF THE UNITED STATES, AND ESPECIALLY TO THE ALUMNI
OF THE PHILADELPHIA HIGH SCHOOL」(本書を合衆国の教師たち、特にフィ
ラデルフィア・ハイスクールの卒業生たちに捧げる)と記されていた。英文で50
0頁を超える大著である原著の内容は、「極メテ多クハ短ク章ヲ別チテコレヲ述
ブ」と原著者が弁明しているごとく、次のような30編もの詳細な目次の構成とな
っている。なお、下記の日本語に翻訳された目次の項目が、一体、どのような英文
の訳文であるのかを知る参考資料として、原書からの英文目次を併記しておくこと
とする。

学室要論 目次

第一編 教授トハ何等ノ事ヲ謂フカヲ論ズ

(I. WHAT IS TEACHING?)

第二編 設問術ヲ論ズ

(II. The ART OF QUESTIONING)

第三編 教授ト練習ト自ラ別アルヲ論ズ

(III. THE DIFFERENCE BETWEEN TEACHING AND TRAINING)

第四編 背誦ヲ聴ク方法ヲ論ズ

(IV. MODES OF HEARING RECITATIONS)

第五編 オヲ開キ能ヲ達スル主トシテ次序ニ注意スベキヲ論ズ

(V. ON OBSERVING A PROPER ORDER IN THE DEVELOPMENT OF
THE MENTAL FACULTIES)

第六編 児童ノ理会シ難キモノヲ教授スルコトヲ論ズ

(VI. TEACHING CHILDREN WHAT THEY DO NOT UNDERSTAND)

第七編 少年輩ノ記憶力ヲ養成スルコトヲ論ズ

(VII. CULTIVATING THE MEMORY IN YOUTH)

第八編 事ヲ記憶スルニハ先ツ其理ヲ了解スベキコトヲ論ズ

(VIII. KNOWLEDGE BEFORE MEMORY)

第九編 語辭ノ勢力ヲ論ズ

(IX. POWER OF WORDS)

第十編 邦語ノ學習ヲ論ズ

(X. THE STUDY OF LANGUAGE)

第十一編 音声ヲ調整スルコトヲ論ズ

(XI. CULTIVATING THE VOICE)

第十二編 視力ヲ論ズ

(XII. EYES)

第十三編 石窟ノ誤見ヲ論ズ

(XIII. ERRORS OF THE CAVE)

第十四編 唯一思想ヲ有スルニ止マル人ヲ論ズ

(XIV. MEN OF ONE IDEA)

第十五編 教授ヲ巧ニスル才幹ヲ論ズ

(XV. A TALENT FOR TEACHING)

第十六編 教授力ヲ論ズ

(XVI. TEACHING POWER)

第十七編 成長ヲ論ズ

(XVII. GROWING)

第十八編 兒童ヲ親愛スルヲ論ズ

(XVIII. LOVING THE CHILDREN)

第十九編 教師生徒ノ景慕ヲ得ルヲ論ズ

(XIX. GAINING THE AFFECTIONS OF THE SCHOLARS)

第二十編 兒童ノ從順ヲ論ズ

(XX. THE OBEDIENCE OF CHILDREN)

第二十一編 馴養者「レーリー」氏ノ事ヲ記ス

- (XXI. RAREY AS AN EDUCATOR)
- 第二十二編 寄宿学校ニ実験セルノ事ヲ記ス
- (XXII. A BOARDING-SCHOOL EXPERIENCE)
- 第二十三編 骨相学
- (XXIII. PHRENOLOGY)
- 第二十四編 師範学校ヲ論ズ
- (XXIV. NORMAL SCHOOLS)
- 第二十五編 実験教授法ヲ論ズ
- (XXV. PRACTICE-TEACHING)
- 第二十六編 性理ノ勢力ニ留意シ性理ヲ修養スル方法ヲ論ズ
- (XXVI. ATTENTION AS A MENTAL FACULTY, AND AS A MEANS OF
MENTAL CULTURE)
- 第二十七編 生徒ノ注意ヲ得ルノ論
- (XXVII. GAINING THE ATTENTION)
- 第二十八編 勸誠
- (XXVIII. COUSELS)
- 第一 少年教師ヲ勸誠スルノ説
- (1. TO A YOUNG TEACHER)
- 第二 新生徒ニ授与スル勸誠
- (2. TO A NEW PUPIL)
- 第三 寄宿学校ヨリ退去スル幼少婦女ニ授与スル勸誠
- (3. TO A YOUNG LADY ON LEAVING SCHOOL)
- 第四 将ニ師範学校ニ入ラントスルー学生ニ授与スル勸誠
- (4. TO A PUPIL ON ENTERING A NORMAL SCHOOL)
- 第二十九編 普通科小学設立ノ大意ヲ論ズ
- (XXIX. AN ARGUMENT FOR COMMON SCHOOLS)
- 第三十編 教育トハ果シテ何事ナルヤヲ論ズ
- (XXX. WHAT IS EDUCATION?)

以上のような内容構成の中で、例えば最初の「第一編 教授トハ何等ノ事ヲ謂フ

カヲ論ズ」の冒頭で、筆者は「教授」という教育用語の概念を次のように規定している。

凡^{およ}ソ教授トハ固ヨリ唯単一ノ談話ヲ云フニ非ス。夫レ一事ヲ以テ一級生徒ニ口授^{こうじゅ}スルコト二十回ニ至ルモ、尚其事ヲ領^{りょう}會^{かい}シ得ザル者アリ。是ニ由テ之レハ、其生徒ニ対シ独リ之ヲ口授スルヲ以テ必ズシモ教授ト稱スルヲ得ベカラザルナリ。世ノ教師ノ十全ノ知識ヲ善クスル者、其教授ヲ為スノ時ニ方^{あたり}テ、多クハ皆始ヨリ終ニ至ル迄、一ニ快^{かい}捷^{しょう}ノ弁ヲ以テ其生徒ノ為メニ談論スルヤ。余之ヲ知レリ。然レドモ其生徒ノ学業ヲ試査スルニ及テハ、其知識ヲ開達セル所、実ニ僅々ニ過キザラントス。⁽¹³⁾

また、最終編の「教育トハ果シテ何事ナルヤヲ論ズ」では、「教育」の概念を次のように規定している。

夫レ教育ハ第一人ノ知覚ヲ開通スルニ在リ。其次ハ才能ヲ導^{どう}起^きシ、且堅個ヲ得セシムルニ在リ。又、其次ハ其才能ヲシテ方向ヲ誤ラス暢^{ちやう}發^{はつ}セシムルニ在リ。是故ニ教育ハ只人ヲシテ知識ヲ増殖セシムルノミノ謂ニ非ス。元來知識ノ兒童ノ意志ニ於ケルハ猶食物ノ其体ニ於ケルカ如ク、彼ハ以テ心智ヲ養フ所、此ハ以テ身支ヲ育フ所、共ニ一ノ目途トスル所ヲ成就スル手段ナリ。⁽¹⁴⁾

教育トハ適宜ノ次序ト適宜ノ秤^{しょうりょう}量^{りょう}トヲ度^{はかり}テ、人性中、良善ニシテ希望ス可キ才能ヲ開達スルニ在リ。⁽¹⁵⁾

上記のような内容のアメリカ教育書『学室要論』を、日本の教育史学界で本格的に取り上げて論評した最初は、吉田熊次『本邦教育史概説』である。同書の刊行は、大正11年(1922)4月であった。吉田熊次(1874-1964)は、当時は東京帝国大学教授の教育学者で、国定教科書の編纂や文部省関係の各種委員を歴任し、日本の教育界に大きな影響力を有していた。それ故に同書は、出版と同時に反響を呼び、版を重ねた。同書の「後篇 明治以後の教育発達」の中で、吉田は、『学室要論』を取り上げ、4頁にも亘って内容と特徴を詳細に紹介している。同書

が、生徒の調和的発達や個性教育、さらには身体の健康の保全など、従来の日本の教育には見られなかった教育の新知見を示している点を高く評価している。しかしながら、日本語の訳文に関しては、「此の訳文を読んだだけでも如何に当時の思想の生硬であったかと云ふことが分る。思ふに教育に関する理論を細かく考えると云ふやうなことは、まだ極めて幼稚であったと思ふ。⁽¹⁶⁾」と論評しているが、誠に要を得た指摘といえる。

次に本書に着目し、内容に立ち入って厳しく検討を加えたのは、稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』であった⁽¹⁷⁾。同書は、明治初期に紹介された欧米教育書を教育思想史的な観点から分析した研究書である。同書の中で稲富は、吉田の場合を超える多くの紙幅を費やして、『学室要論』を取り上げ吟味している。彼は、まず『学室要論』の概要を紹介し、原著者ハートの教育思想を、「児童の自発活動にもとづく自己発展を教育の本質と考えるものであって、古くはソクラテスの産婆法、近くはペスタロッチの開発主義が、明らかにハートの教育思想の根底をなしている」と捉え、「エジュカーレといふ事の本来の意味に立脚した心性開発の教育方法が、要するにハートの説こうとする所」であり、「西洋教育学上の定石的な思想を、実際教授や教師の問題に具体化して説いた所に本書の価値があると共に、また当時の我が教育界に対する存在意義でもあった」と論評した。特に稲富が問題点として厳しく指摘したのは、ファン・カステールの翻訳であった。稲富は、『学室要論』の英文原書に即して翻訳書の日本語訳文を詳細に比較校合し、次のように具体的事例を上げて誤訳や脱漏を厳しく指摘したのである。

第一篇「教授トハ何等ノコトヲイウカラ論ズ」の冒頭の第一節は可なりとしても、次節冒頭の原文“*There are several time-honored metaphors on this subject, which need to be received with some grains of allowance, if we would get an exact idea of what teaching is*”を、カステールは「ソモソモコノ一篇ノ主意ニ就テ相類似セル者ヲ引テ^{あまた}数多ノ比喻ヲ設ケタリトイエトモ、然レトモ人若シ^{いわゆる}所謂教授トハ果シテ何ラノコトヲカイフト顧思シ、ソノ精密ノ趣旨ヲ会得スルニ至テハ、ソノ比喻ニ於テ必ス将ニ多少相違スル所アルヲ知ラントス」と訳しているが、これは明らかに正しき訳文とは言い難いばかりでなく、日本文としても極めて^{せつれつ}拙劣不完全であり、いわんやこれを読む者が原書の真義を了解

することは全然不可能であると言わねばならない。⁽¹⁸⁾

明治9年(1876)という早い時期に出版された英文教育書の翻訳書である『学室要論』は、稲富が指摘するように、明治の後半以降、欧米諸国への留学経験のある日本人によって日本語に翻訳された教育書の場合とは、比較にならないほどに生硬で稚拙な訳文であったことは否めない。翻訳したオランダ人のファン・カステールは、英語ができるとはいっても日本での語学教師として数年の教育経験を有するのみで、一通り英語と日本語の両方がわかるというだけで翻訳を委嘱されたわけである。彼は、決して教育の専門家でも英文の翻訳家でもなかった。残念ながら明治初期の日本においては、他に適当な人物がいなかったのである。

校訂した虎三郎の方もまた、同様であった。彼は、洋儒兼学を旨とする象山門下の秀才であり、幕末蘭学にも精通してオランダ語の翻訳書を幾冊も手がけていた。だが、彼は、基本的には江戸時代の漢学教育を受けた正統派の漢学者であり、中国漢書に訓点を施して翻刻したり、漢詩文を自由に草することなどは容易であった。しかしながら、明治維新を迎えて、時代は蘭学から英学へと一変し、オランダ語は英語に取って代わられてしまった。虎三郎とも親交のあった福沢諭吉は、蘭語から英語に切り替える際の苦心談を、自叙伝に次のように記している。

その時の蘭学者全体の考えは、私を始めとして皆、数年の間、刻苦勉強した蘭学が役に立たないから、丸でこれを捨ててしまつて英学に移ろうとすれば、新たに元の通りの苦しみをもう一度しなければならぬ。誠に情けないつらい話しである。⁽¹⁹⁾

刻苦勉強してオランダ語の原書を翻訳できるまでに蘭学を修得していた虎三郎にとつても、時代の移ろいに対する無念の思いは、福沢と同じであつたに違いない。彼にとって、新時代を象徴する英語は、全く未知の外国語であつた。しかし、江戸を遠く離れた越後長岡で、長い謹慎生活を送らなければならなかつた彼にとつては、福沢のように蘭学から英学に切り替え、新たに英語を習い直すことは不可能なことであつた。明治の戊辰戦争後、不惑を過ぎた彼は、謹慎を解かれて自由の身となつたが、今度は長岡藩政の執政に選挙されて、廢墟からの復興を委ねられた。しかし

ながら彼は、復興事業の半ばに郷里長岡を去って上京し、再び学究的生活に戻ろうとしたわけである。だが、病軀に苦しむ不惑を過ぎた彼にとって、文明開化を象徴するアメリカの言語である英語を、新たに習得する暇は全くなかった。

そんな彼に、偶然の必然か、外国人が英文原書を翻訳した日本文の校正を、文部省から委嘱されたのである。英語を学び直すことのできなかつた彼には、ファン・カステールが訳した日本文を、英語の原文と比較校合して校訂することは不可能なことであった。あくまでも彼は、外国人が訳した日本語を、漢学教育を受けた寺子屋教師などを中心とする明治初期の小学校教師たちが理解できる日本文であるか否かを念頭において、校訂作業を進めざるをえなかつた。したがって、彼が校正した日本文は、明治初期とは言え、いまだ漢学を主体とする近世儒教社会の延長上にある日本語の文体であり語彙であった。それ故に、後世の日本人からみれば、漢学者の虎三郎が校訂した翻訳書の日本文が生硬かつ難解と受け止められるのは、時代の相違で、やむを得ないことであった。特に英語が普及した現代社会において、いまだ鎖国から開国に転じたばかりの明治初期になされた、同書の翻訳の稚拙さを指摘することは容易なことである。だが、欧米先進国の教育文化に接する機会の全くなかつた明治初期の学校教師たちの側から、翻訳教育書の嚆矢である『学室要論』の歴史的意義を考えたとき、同書は、従前の漢学を中心とする日本の伝統的な教育界にはみられなかつた斬新な教育の理論や知識を提供してくれる、教育新知識の源泉となつたであろうことは想像に難くない。

以上のような吉田熊次と稲富栄次郎の見解は、昭和戦前における教育史研究の水準での『学室要論』の理解と評価を示したものである。次に、昭和戦後の研究成果として注目すべきは、昭和50年(1975)に刊行された平松秋夫『明治時代における小学校教授法の研究』である。明治以降における近代日本の小学教育界に翻訳紹介された欧米諸国の教授法に関する膨大な数の論文や著作を、受容された時系列に沿って詳細に整理分析した同書では、『学室要論』の概要が簡潔に紹介され、同書の教育学上における特徴が次のように述べられている。

その立場は自然主義であり、全篇を通じて、客観的自然主義と主観的自然主義の教育観を、随処にうかがうことができる。教授論をみても、「教授トハ何等ノ事ヲ謂フカラ論ズ」(第一篇)において、教授上凡百の方法中、「唯一方法

ノ最モ有益且ツ必要ナル者ハ即チ生徒自己ノ勉励ヲ助導スル是ノミ」と断定している。この書は、主として小学校の教授法を論じたものであるといわれるごとく、第二篇以下において、教授上の実際問題を多く取り扱っているが、中でも「設問術ヲ論ズ」（第二篇）は、開発主義の方法を具体的に説いたものである。⁽²⁰⁾

第三節 虎三郎校訂、アメリカ教育書『教師必読』の内容と特徴

ファン・カステールと虎三郎とがコンビを組んで翻訳・校訂し、文部省から刊行されたアメリカ教育書の第二弾が、『教師必読』であった。刊行されたのは、何と『学室要論』の翌月、すなわち明治9年（1876）7月のことであった。同書は、明治初期の日本の教育界において、先の『学室要論』とは比較にならないほどに大きな反響を呼び、現職の学校教員たちの間で広く読まれ、さらには全国各地の師範学校においても教科書として採用されるなど、明治前期における教職教育上の不可欠な教育書として全国に普及した。文部省から出版された同書の扉には、次のような刊行の辞が掲載されていた。

此書原名ヲ「チーチャルス、アシスタント」ト云フ。米人チャーレス、ノルゼント氏ノ著ス所ニシテ、西曆一千八百七十三年、同国ノ発行ニ係レリ。和蘭人ファン、カステール氏来リテ我邦ニ寓スル茲ニ年アリ。其和英両語ニ通スルヲ以テ嘱シテ此書ヲ訳セシム。訳成ルニ及ヒ刊シテ以テ教育ニ従事スル者ノ一覽ニ供ス。

明治九年七月⁽²¹⁾

上記の文部省による紹介文には、『学室要論』の場合とは異なり、執筆者が記されてはいなかった。だが、内容の形式は、『学室要論』の場合と全く同じである。原著者は、アメリカ人の「チャーレス、ノルゼント」（CHARLES NORTHEND, A.M., 1824-1895）という人物であった。彼は、マサチューセツ州に生まれ、初等・中等学校の教師を経て、師範学校長やアメリカ各地の郡や州の教育委員を務め、やがてア

メリカ教育会（American Institute of Instruction）の会長を歴任した。公職を引退してからには執筆活動に専念し、豊かな教育経験を生かして数多くの教育書を遺した²⁾。彼の代表的な著作の一つが『教師必読』の原著となった「チーチャルス、アシスタント」(“THE TEACHERS'S ASSISTANT”,1873)であった。日本に翻訳紹介されたノルゼントの教育書は、『教師必読』の他にも、日本人の小泉信吉・四屋純三郎の共訳で刊行された『那然氏小学教育論』(“THE TEACHER AND THE PARENT ; TREATISE UPON COMMON SCHOOL EDUCATION”,1853)があり、同書もまた明治初期の日本教育界に多くの読者を得て版を重ね、大変な好評を博した教師用教育書であった。

ところで『教師必読』には、原著者であるノルゼント自身の、次のような日本語に訳された序文が収められていた。

チーチャルス、アシスタント
教師必読原序

此書ハ、作者其朋友ヨリ教授ノ方法ニ関涉スルー二ノ件款ニ於テ箴言訓語ヲ請求セラレシニ因テ著述セルモノニシテ、記者ハ其請求ニ応スルニ、学校ニ在リテ行フベキ義務ト学校中演習ノ方法トニ就テ、多少解シ易キ書籍ヲ作ルハ、衆人ノ為ニ最モ有益ナルベキヲ想起シ、是ニ於テ此書ヲ編輯シテ、其意ヲ達スルコトヲ得タリ。而シテ此書ハ、其適宜ニシテ簡要ナルヲ証セント欲シ、之ヲ世ニ公ニシ、殊ニ教師輩ノ為ニ^な做スナリ。又、卷中数種ノ書簡ハ、實際ニ経験スル所浅クシテ、其智識限リアル人ノ急需希望スル所ヲ察シテ、特別ニ之ヲ書記シ、且ツ其中ニハ作者ノ教授事務ノ上ニ就テ、種々ノ経験ニ由テ自得セシ所ノ貴ブベキ意見ヲ包括シ、又其貴ブベキ忠告ヲモ含有セリ。

然レトモ、是固ヨリ教授ノ方法ヲ完全ニ指示セリト云フニ非ス。又、此書ノ論説方法ハ、必ス採用スベシト云フニ非ズ。何トナレバ、教師タルモノハ決シテ徒ニ^{とらび}諂媚シテ人ノ為ス所ニ模倣スヘキモノニ非ス。又、全ク他人ノ轍ヲ踏テ其業ヲ固執スベキモノニ非ザルガ故ナリ。然レドモ、此書ノ編輯ヲ請求セシ人ノ為ニハ、少シク忠告ト^な做ルベキコトヲ望メルナリ。若シ是ニ由テ一個ノ教師ヲシテ其職業ヲ務ムルニ於テ更ニ精良ナル意見ヲ起サシメ、或ハ学校ノ管理法及ヒ教授法ニ関シテ、更ニ端正ナル思慮ヲ発セシメバ、即チ此書ハ無益ニ著作スルモノニ非サルコトヲ悟ルベシ。

蓋シ此書ハ、作者ノ心中深ク他ノ教師輩ノ当ニ担当シテ成育スベキ所ノ少年生ヲ練習教訓センコトヲ努力スル者ト、感覺ヲ固ウスルノ情実ヲ吐露シ、以テ教師輩ニ真個ニ此書ヲ熟思センコトヲ^{しやうよう}慫慂セシモノナリ。而シテ教師輩ハ、皆貴重ナル職業ニ劳作スルモノナレバ、汲々乎トシテ其任ニ適スベキ材能^{さいのう}ノ更ニ高尚ニシテ且ツ善良ナルヲ得ンコトヲ勉励シ、而シテ此緊要ナル職業ニ従事スルモノ、中ニ在リテ、貴重ナル德行ヲ有シテ、他人ニ尊崇セラレ、人タランコトヲ希望スベキナリ。

此書ノ題号、教師ノ助力人ト訳ス。即チ教師タルモノ、此書ヲ以テ助力人ト^な做スノ義ニシテ、凡ソ学校ノ義務規律及ヒ一切教育ニ関係スル所ノ告知、并ニ方法ヲ記載セリ。

紀元一千八百五十九年六月

チャールス、ノルゼント 識⁽²³⁾

上記の序文に明らかなごとく、本書は、原著者が朋友から教授の方法に関する箴言訓辞を求められて執筆した教師用の教育書であった。その内容は、序文にみられる通り、「学校ノ義務規律及ヒ一切教育ニ関係スル所ノ告知並ニ方法ヲ記載」して、「教師ヲシテ其職業ヲ務ムルニ於テ更ニ精良ナル意見ヲ起サシメ、或ハ学校ノ管理法及ヒ教授法ニ関シテ更ニ端正ナル思慮ヲ発セシメ」ることを目的に書かれたものであった。同書は、日本語の翻訳版で530頁を超える大著であるが、その内容は本編22章と附録9章からなる次のような構成であった。以下に原書からの英文を付した「教師必読目録」を示しておく。

教師必読目録

第一書	教師当然ノ職掌	一丁
(LETTER I THE TEACHER'S VOCATION)		
第二書	忍耐 模範ト ^な 做スヘキ品行及ヒ容儀	九丁
(LETTER II PATIENCE-EXEMPLARY CHARACTER AND DEPORTMENT)		
第三書	愉快 劳作ヲ好ム事等	二十丁
(LETTER III CHEERFULNESS-LOVE FOR THE WORK, ETC.)		
第四書	職務ヲ改正スベキ方法	三十六丁

	(LETTER IV MEANS OF PROFESSIONAL IMPROVEMENT)	
第五書	学校ノ規律及ヒ其管理法	五十三丁
	(LETTER V SCHOOL DISCIPLINE AND SCHOOL MANAGEMENT)	
第六書	父母ノ助成	九十三丁
	(LETTER VI PARENTAL CO-OPERATION)	
第七書	修身ノ教誨	九十九丁
	(LETTER VII MORAL INSTRUCTION)	
第八書	口授教法	百二十四丁
	(LETTER VIII ORAL TEACHING)	
第九書	諳誦	百三十四丁
	(LETTER IX RECITATIONS)	
第十書	物課	百五十六丁
	(LETTER X OBJECT LESSONS)	
第十一書	読書	百九十丁
	(LETTER XI READING)	
第十二書	綴字	二百二十三丁
	(LETTER XII SPELLING)	
第十三書	習字	二百四十九丁
	(LETTER XIII PENMANSHIP)	
第十四書	文法	二百六十六丁
	(LETTER XIV GRAMMAR)	
第十五書	作文	二百九十二丁
	(LETTER XV COMPOSITION)	
第十六書	地理学	三百十九丁
	(LETTER XVI GEOGRAPHY)	
第十七書	数学	三百五十九丁
	(LETTER XVII ARITHMETIC)	
第十八書	記簿法 生理学 図書学 歴史学 歌学	三百八十五丁
	(LETTER XVIII BOOK-KEEPING.-PHYSIOLOGY.-DRAWING.-HISTORY,ETC.)	
第十九書	講義 治国ノ法 自然ノ学習 言語ノ学習 雑事ノ了解	

		四百十七丁
	(LETTER XX DECLAMATION.-STUDY OF NATURE AND OF WORDS,ETC.)	
第二十書	小学校	四百四十一丁
	(LETTER XX PRIMARY SCHOOLS)	
第廿一書	習慣	四百六十丁
	(LETTER XXI HABITS)	
第廿二書	学校ノ試験及ヒ褒賞	四百六十八丁
	(LETTER XXII SCHOOL EXAMINATION AND EXHIBITIONS)	
附録(APPENDIX)		
附録 第一	学校事務ノ手簿	四百八十丁
	(MANUAL OF SCHOOL DUTIES)	
同 第二	教師ノ守ルヘキ規則	四百八十八丁
	(RULES FOR TEACHERS)	
同 第三	教師ノ己ヲ省察スル疑問	四百九十二丁
	(QUESTIONS FOR SELF-EXAMINATION)	
同 第四	書生ノ守ルヘキ規則	四百九十五丁
	(RULES FOR SCHOLARS)	
同 第五	教師生徒ノ共ニ遵守ナベキ規則并ニ條例	四百九十九丁
	(RULES AND REGULATIONS APPLYING TO TEACHERS AND PUPILS)	
同 第六	教師ノ為ニ有益ナル書籍	五百二丁
	(BOOKS FOR TEACHERS)	
同 第七	学校書庫ニ備フヘキ書籍	五百二十二丁
	(BOOKS FOR SCHOOL LIBRARIES)	
同 第八	学校書庫ノ規則及ヒ條例	五百三十九丁
	(RULES AND REGULATIONS FOR SCHOOL LIBRARIES)	
同 第九	学校器具、学校格言及ヒ記録等	五百四十三丁
	(APPARATUS,SCHOOL MOTTOES,RECORDS,ETC.)	
教師必読目録 畢 ⁽²⁴⁾		

以上のようなファン・カステール訳、虎三郎校訂になるアメリカ人ノルゼントの著した教育書『教師必読』は、「小学校教員たること殆ど二十年の経験を積んで、『小学教育論』を著した。(中略)小学校の教育の実際に直接関係する事柄を記録したものであって、教育学説というような抽象的のことを述べたものではない⁽²⁵⁾」といわれる内容であった。学校現場における教師の教育実践に有益たらんとし、て執筆された同書の内容は、「教師たらんとする者に対しては、書簡の形を以てその心構・修養の心得・教授の態度等を教示⁽²⁶⁾」している。

同書が日本で翻訳出版されると、前述のハート著『学室要論』などと共に、明治初期の教育界において、「最も広く愛読せられ、師範学校の教科書としてさえ使用」された教育書となり、「その我が国に及ぼせる影響も大きく、われわれは当然これを無視することが許されない⁽²⁷⁾」と評されるほどに、大きな歴史的意義を有する翻訳教育書であった。そのような同書の教育学上の特徴としては、当時のアメリカ教育界に普及していた「コメニウス流の自然主義に立って、天然の教法を力説しているが、ペスタロッチ流の開発主義の思想も、処々に発見される⁽²⁸⁾」という点にあるとされた。

第四節 虎三郎校訂、イギリス教育書『童女筌』の内容と特徴

これまでオランダ人ファン・カステールの日本語訳で、それを日本人の虎三郎が校訂した2冊のアメリカ教育書、すなわち『学室要論』『教師必読』の内容と特徴とをみてきた。だが、ファン・カステールと虎三郎のコンビによる教育書の翻訳出版には、アメリカ物だけでなく、イギリス物も手がけられていたのである。すなわち、原著者がイギリス人のヴァレンタイン (VALENTINE) という人物の教育書 (“GIRLS OWN BOOK OF AMUSEMENT”, 1873) である。『童女筌』という標題で日本語に翻訳された同書は、実に大部な書物であったので、2巻に分冊され、第1巻 (597頁) が先の『教師必読』と同じ明治9年 (1876) 7月に、第2巻 (589頁) がその半年後の明治10年1月に、相次いで文部省から出版された。いずれも英文から日本語への翻訳はファン・カステール (「オランダ・カステール和蘭漢加斯底爾訳」) であった。が、校訂の方は、第1巻が虎三郎と村山徳淳の2人でなされ、第2巻の方は虎

三郎の単独での校訂であった。

明治初期の日本におけるファン・カステールの翻訳業績の一つであるイギリス教育書『童女筌』については、今日までほとんど知られていなかった。管見の限りでは、同書の概要を初めて紹介したのは、唐澤富太郎である。彼は、『図説教育人物事典』（上巻）の中で、同書の翻訳書の写真を掲載して、次のように概要を紹介している。

本書の内容は、人の父母たる者に示すもので、色々の遊戯、例えば鬪牌戯、独楽戯、教育遊具をはじめ、「裁縫匠の針通」のような手工的なもの、また知らなければならぬ本草物産、鳳仙花の説話、蜜蜂の説話、狼および牧羊者、小童女輩修身の訓話など極めて多くの項目を掲げ、図も相当入れて書いているもので、巻一は五九七ページ、巻二は五八九ページに及ぶものである。⁽²⁹⁾

さて『童女筌』であるが、同書の上巻である「巻之一」の扉には、先にみたファン・カステール翻訳の『学室要論』や『教師必読』に付されていた推薦文（刊行の辞）と同じ形式と内容の文章が、しかも『学室要論』の場合と同じ「大井鎌吉」という文部省関係者による、次のような紹介文が掲げられていた。

此書原本英文ヲ以テ記セルモニシテ其名ヲ「ゲアルス、アウン、ブック」ト云フ。英人「エル、ファレンタイン」女氏ノ編修ニ係リ西曆一千八百七十三年龍動ニ於テ発兌^{はつだ}セシ所ナリ。荷蘭人「ファン・カステール」氏来テ我国ニ寓スルコト久シ、其英語ヲ解シ兼テ国語ニ通ズル故ヲ以テ嘱シテ此書ヲ訳セシム。訳成ニ及デ刻シテ以テ児女ノ為ニス

明治八年十一月

大井鎌吉 識⁽³⁰⁾

上記の推薦文で不思議なのは、日付である。この『童女筌』の刊行の日付けは「明治八年十一月」となっており、先に刊行された『学室要論』の場合の「明治八年十二月八日」よりも早い。すなわち出版された二つの翻訳書の刊行の順序は、時間的には逆の日付になっている。このことは、『学室要論』が刊行される時点で、すでに『童女筌』の翻訳もでき上がっていたことを物語っていると推察される。が、

断定はできない。

この『童女箴』にも、日本語に訳された原著者の長文の「童女箴原序」が付されていた。その最初には、同書は、原著者が「一己ノ意見ト経験」に基づいて、女兒教育に必要な「遊戯ノ説」「縫綴編ノ方法」「快話ナル運動」「威儀礼貌ノ事」などについて、「余カ所思ヲ陳述」した教育書である、と述べられている。そして女兒教育が如何に大切であるか、その意義が次のように記されていた。

童女輩ハ、先ツ如何シテ人間ニ利益スル所アルベキヤヲ学知セザルベカラズ。且ツ浩漠タル芸林中ニ生立スル人ハ、必ス悉皆其身ヲ改良シテ、至高ノ地位ニ達センコトヲ求ムベシ。而シテ人民ノ自由ヲ得タル此国ニ於テハ、巧妙ナル技芸ト精良ナル意匠ト、及ヒ作法ニ威儀アルトヲ学習セント欲スルトキハ、他ノ貴重ニシテ簡要ナル義務ヲ行フノ間ニ在テ、勉励修成スヘキ許^{きよた}多ノ時間無キニ非ズ。又、各国共ニ実ニ其娘子輩ヲシテ卑賤ナル職事ニ於テモ、能ク其義務ヲ完了スルコトヲ得セシメ、又高尚ナル地位ニ在テモ、之ヲシテ益々高貴盛大ニスルニ適セシメンガ為メ、能ク教育スルコトハ甚タ緊要ナリ。⁽³¹⁾

以上のような趣旨と内容をもって書かれた本書の特徴は、序文に「画工ノ練熟且良善ナル意匠」を取り入れて、図解するための沢山の精巧な挿絵が収められていたことである。本書は、漢学者である虎三郎が日本語の訳文を校訂した故にか、前述の『学室要論』や『教師必読』の場合と同様に、今からみれば実に生硬で難解な漢文調の日本語であった。だが、随所に挿入された図解によって、視覚に訴えて文意を理解できるように創意工夫が凝らされていた。

思えば明治の近代に入っても、江戸時代の身分制社会における男尊女卑の風潮を反映してか、男女の教育格差は非常に大きかった。明治5年に学制が發布され、国民皆学を期して男女が等しく就学すべしと規定された小学校でも、女兒の就学率は、男児に比してはるかに低かった。明治5年に学制が發布された翌6年における男女別の小学校就学率は、男児が39.9%であるのに比して、女兒はその半分以下の15.1%であった。同8年に男児は50%を超えるが、女兒は18.7%に過ぎなかった⁽³²⁾。如何にして女兒の就学率を高めるか。この問題は、小学教育を基盤とする近代日本の学校教育の重要な課題であった。そのような時期に、虎三郎校訂、

ファン・カステール訳で、文部省からイギリスの女児教育書『童女笈』が刊行されたことの歴史的意義は大きい。実務的な女児教育の実際を説く同書こそは、近代日本に紹介され欧米女児教育書の嚆矢であったといえる。

おわりに

以上、明治初期にオランダ人ファン・カステールが翻訳し、その日本語を虎三郎が校訂した欧米物の翻訳教育書について、その内容と特徴とをみてきた。彼等が翻訳、校訂して日本の教育界に紹介した欧米教育書は、豊富な教師経験に基づく欧米の原著者たちが、教員の養成・研修に有用な実践的な教育書として、教師論や教職論、あるいは教育内容論や教育方法論などをまとめたアメリカ最新の著作であった。

国民形成という日本近代化の重要な国家的課題の一翼を担った文部省は、明治5年（1872）の学制発布の後、欧米各国の教育書や教授書の翻訳刊行を積極的に推進した。しかし、翻訳に当たっては、どのような目的や基準で、如何なる書物や論文を翻訳すべきかという基準設定に関しては定かでなく、決して主体的な選択が働いていたとは言い難い。ただ「雑然と手当たり次第」⁽³³⁾に進めていった、と評されてもやむを得ない現実があった。また、翻訳に当たる人物についても、「教育に興味を持つからというよりは、語学に長ずるとの理由」だけで選ばれた、と指摘される通りであった⁽³⁴⁾。

ファン・カステール翻訳、虎三郎校訂の『学室要論』や『教師必読』に象徴されるがごとく、「泰西の教育思想がわが国に入った嚆矢は、アメリカ刊行の教育書⁽³⁵⁾」といわれるように、明治10年前後までの翻訳教育書のほとんどは、アメリカ人の教育書であった。なぜ、アメリカ人の教育書が歓迎されたのか。その理由は何か。これらの疑問に答えるに、「内容が如何にも深切にして爺から小言を聴き、坊主から御説法を承るやうな心持ちのする、いわば教員心得ないし教授必携とでも名付くべきもので、管理法とか教授法とかについての、直ちに教育の実際に役立つ卑近で且つ浅薄な事柄を、断片的に集めたにすぎなく、差し迫った当時の教育界の要求と合致していたから⁽³⁶⁾」とは、実に要を得た指摘である。

昭和の戦後に教科書研究で大きな研究業績を残した唐澤富太郎は、明治初期にお

ける翻訳教科書の受容の歴史的な意義を次のように論述している。

明治初期欧米教育学の摂取は、先ずアメリカから始まった。文部省最初の翻訳書「彼日氏教授論」（明治九年）、「教師必読」（明治九年）などは、いずれもアメリカの教育書を、オランダ人に依頼して日本語に訳して出版しているのである。その訳が生硬且つ不完全であることはいうまでもないが、このことから、いかに明治政府が急いで欧米先進諸国の教育を摂取して一日も早く日本を近代化しようとする腐心していたか、その苦渋の跡をまざまざと感じさせるものがある。

なお先ずアメリカの摂取から始まったということは、実用主義の国として極めて実地的な国において行われている教育の仕方を、いち早くとり入れて、日本の近代教育の実行に役立たせようとしたからに外ならない。したがって、それは教育の目的を論ずるといふよりも、どのようにしたら従来の寺子屋式の教育方法を脱却して、近代学校の一斉教授法へと進められるかを学ぼうとしたものに外ならなかった。⁽³⁷⁾

唐澤が指摘するごとく、ファン・カステールが英文を日本語に訳し、その日本語を虎三郎が校訂して刊行した欧米翻訳教育書は、いまだ江戸時代の漢学的教養が主流を占めた明治初期の日本語であり、今からみれば稚拙な訳文で読みにくく、現代日本人の誰もが内容を十分に理解できるほどに簡明な日本文では決してなかった。だが、ファン・カステールと虎三郎による欧米翻訳教育書の刊行は、歴史的にみれば、教育近代化に向かつての実に先駆的な事業であった。日本の教育近代化を緊要な国家的課題とする文部省は、ただ英語と日本語ができるというだけでオランダ人ファン・カステールに英文原書を日本語に翻訳させた。そして、その日本語の訳文の校訂を、当時、教育近代化に係る教科書その他の執筆活動を積極的に展開していた漢学者の虎三郎に委嘱したのである。文部省による、このような人選は、これが最初で最後であった。彼等の後においては、欧米教育書の翻訳は、英語や教育のわかる欧米留学帰りの日本人に委ねるといふ方向に転換されていった。したがって、ファン・カステールと虎三郎のコンビによる翻訳教育書の刊行は、日本が本格的な欧米教育書の翻訳的な受容に向かう端緒を切り開いた開拓的な業績と理解されてよい。

ともかくも、ファン・カステールと虎三郎とのコンビで、明治初期の教育界に送り出した翻訳教育書は、なおも江戸時代以来の寺子屋教育が続く、旧態依然とした明治初期の教育状況の中で、日本の学校教師たちに、翻訳教育書という小さな窓から欧米新教育の実際を垣間みる新たな機会を与えるところとなった。はじめて欧米教育書に接した彼等は、一体、何を感じ、何を考えたであろうか。未知の新世界を知った彼等の心中には、驚嘆と不安、羨望と嫌悪、希望と絶望、賛同と拒絶、等々の複雑な思いが渦巻いていたにちがいない。欧米翻訳教育書に最新の教育知識を求めた明治初期の学校教師たちは、欧米社会の新教育に対するアンビバレントな心境を乗り越えて、国民形成を目的とした日本の教育近代化の一翼を、学校現場で担わされていったのである。

なお、虎三郎が遺した史料の中に、「ピ^キ子オ氏英文典備忘」という英語に関するものがあつた⁽³⁸⁾。山本有三は、その著『米百俵』の中で、虎三郎の甥の証言を基に、「小金井博士のお話しによると、病翁は、オランダ語はかなりこなせたがそうですが、英語はずっとあとから始めたので、あまり読めなかったということです。⁽³⁹⁾」と記している。何故に虎三郎は、英語に関心を示したのか。その契機は、彼が英文を翻訳した日本語の校訂を依頼されたことによる、とみて間違いない。彼は、外国人であるファン・カステールの訳した日本文を校訂する過程で、叶うことならば英文原書に当たって日本語の訳文を吟味し、より適切な日本語に校訂したいとの衝動に駆られたであろうことは想像に難くない。だが、残念ながら、英語ができず、原典と校合できない。そこから、探求心の旺盛な虎三郎は、一念発起して英語の学習に向かおうとした。しかしながら、英文を翻訳できるまでの英語力を獲得するには、福沢が回顧したごとく、幕末期にオランダ語の修得に要した難行苦行が再び求められ、病軀に苛まれた晩年の虎三郎にとっては、とても叶わぬ夢であった。

【注】

(1) 虎三郎の門人である高橋翠村「病翁小林先生」に、「明治八年八月適東京、遂遊干土佐、翌年還東京、寓神田、後移向島、文部省囑託有所編纂」（松下鉄蔵著『小林病翁先生伝』所収、同書6頁、1930年刊）とあるが、この記述には信憑性が認められる。虎三郎は、学校建設による廢墟長岡の復興を企図した美談「米百俵」の出来事の後、明治4年8月に上京した。虎三郎の上京を知った文部省は、彼を「文部省中博士」に叙任しようとした。だが、この文部省の招聘を彼は辞退した（前出の高橋翠村「病翁小林先生」に「文部省以中博士召、不就」）。その後すぐに、実弟の雄七郎の土佐行きに同行した。

だが、翌5年には、実弟の土佐藩との教員契約が切れ、東京に戻った。以後、彼は、東京の実弟宅に寓居したが、明治6年には『小学国史』（全12巻）を出版し、翌7年には漢書『德国学校論略』（上下2巻）を翻刻し刊行した。このような帰京後の精力的な文筆活動の後に、彼が着手したのが、文部省囑託という肩書きで、御雇い外国人のオランダ人ファン・カステールが相次いで訳出した欧米教育書の日本語訳文を校訂する作業であった。

以上のような上京後の虎三郎が辿った活動の経緯が、高橋翠村「病翁小林先生」には簡潔に記録されている。

(2) 虎三郎の遺稿集『求志洞遺稿』に寄せた象門後輩の北沢正誠の「序」。

(3) 同上の遺稿集『求志洞遺稿』を編纂刊行した外甥の小金井権三郎の「小林寒翠翁略伝」。原文は「尋朝廷徵翁。挙文部省博士。翁以病辞之。」（『求志洞遺稿』所収「小林寒翠翁略伝」）。

(4) 虎三郎が『德国学校論略』を翻刻した明治7年（1874）の時点で、維新政府に出仕していた象山門人を、『明治七年 掌中官員録 全』（西村組商会刊行、『明治初期の官員録・職員録』第2巻所収、1977年、寺岡書洞）により紹介した。

当時の文部省をはじめとする維新政府には、虎三郎と同門の象山塾関係者の他にも、極めて昵懇の間柄にあった中村正直など、彼が幕末期の江戸遊学

中に知り合った旧知の人々が幾人もいた。

- (5) オランダ人のファン・カステールが英文原書を日本語に翻訳したことは間違いないが、その日本語の訳文を、直ちに小林虎三郎が校訂したのではなかったのである。実は、間にもう一人、英文の助訳と日本語の校訂を手伝った人物が存在したのである。この事実を明らかにしたのは、古賀武夫論文「藩校育徳館の近代化(十)」(西日本文化協会編『西日本文化』第202号)である。同論文には、確かな資料的裏付けをもって次のように記されている。

寛昇三(カステールと共に小倉藩の藩校育徳学校で洋算を教えていた人物、筆者注)の「履歴書」にも、明治七年—明治九年ノ間東京府下ニ於テ蘭人カステール文部省ノ委嘱ニ係ル英文和訳、童女筌、百科全書・学室要論其他数書ノ筆記助訳等ヲ担当セリ」とあって、カステールに同行して上京した寛昇三の協力が大きかったことがわかる。

- (6) 御雇い外国人教師であったオランダ人ファン・カステールの履歴に関する叙述は、主として橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』(1998年、風間書房、169—173頁)を参照。
- (7) ファン・カステールの履歴については、「明治三年(一八七〇)一〇月二六歳で横浜兵部省にお雇い外国人として来日し、同年一〇月から六か月間、英仏語学教師となり、月給八〇ドルを受けた」(唐澤富太郎編『図説 教育人物事典』上巻、きょうせい、645頁)、あるいは「カステールの職業は、すべて英仏語学教師・学校教師・英学教師とあるので、終始一貫語学教師として活動」「文部省から翻訳を委嘱されたのも、その語学力をかわれてのこと」(佐藤秀夫解題「教師必読 ファン・カステール訳」、『近代日本教科書教授書資料集成』第一巻所収、東京書籍株式会社、1982年)等々と紹介されてきた。だが、それらの記述の裏付けとなる資料的な根拠は、国内史料(「外務省記録」や「太政類典」など)に依拠したユネスコ東アジア文化研究センター編『資料 御雇外国人』(小学館、1975年)に収められた下記のような記述であった。

【ファン・カステール】

①〔ア・ト〕②ファン・カステール③フハン・カステラ④⑤フハン・ファン・カステール〔⑤ア・テ〕【原綴】〔Van Casteel, A, T.〕【年齢】①三年閏一〇月当時二六歳【国籍】蘭【雇入場所】①横浜【雇主雇期間】①兵部省（三年一〇月より六ヶ月②豊津藩③小倉県④小倉、豊津県（③五年五月八日満期、更に六ヶ月雇継）⑤駿河台南甲賀町八番地千葉県土族・宮本敦（一〇年八月二〇日—一二年八月一九日、一一年一一月限。「子細有テ解雇、一一年一一月一八日通知」）【職種】①②英仏語学教師③学校教師⑤英語学教師【給料】月給①八〇ドル⑤二五円【備考】③「學術正シク信切ニ教授致シ、殊ニ語学ハ凡八国ヲ兼候ニ付、生徒其志ヲ立勉強刻苦、即今可成出来候者并未ダ学業ハ不進候ヘドモ往々見込ノ人物モ出来、先ツ公私ノ裨益ト申物ニ御座候…」（小倉県伺、文部省宛、五年五月八日）【住所】⑤横浜居留地一二番【出典】①外務省記録六、②太政類典一、③太政類典二、④外務省記録八、⑤外務省記録三

（同上、『資料 御雇外国人』、365頁）

上記の史料を踏まえて、ファン・カステールが語学教師として雇用された豊津県（小倉県）の側から、藩校育徳館に関わるファン・カステールの経緯と彼の小倉在勤時代の状況を詳細に分析したのが、前述した古賀武夫の連載論文「藩校育徳館の近代化」（六）（七）（八）（九）（十）（西日本文化協会編『西日本文化』第189号—202号）であった。同論文によると、豊津藩（小倉藩）は、藩立洋学校の英仏語学教師としてファン・カステールを雇うことになるが、雇用契約は早くも明治4年5月8日に東京で結ばれたたていたこと、雇用された当初は東京の豊津藩邸で英語と独語の授業が行っていたこと、その2年後の明治6年3月に至って九州小倉に移り、現地の豊津県立学校で語学教師として勤務したこと、さらには小倉時代は日本女性と暮らしていたこと、等々のファン・カステールに関する事実が、福岡県関係資料の分析を通して論述されている。

なお、古賀論文（十）では、「稲富栄次郎著『明治初期教育思想の研究』（福村書店刊）によると、明治5年「学室要論」（School Room）を出したと

いうが、それが正しければ、これは彼が大橋洋学校（東京に豊津藩邸にあった藩立洋学校、筆者注）在職中のことになる」と記されているが、そこには事実誤認が認められる。すなわち、ファン・カステール訳のアメリカ教育書『学室要論』が、小林虎三郎の校訂を経て文部省から刊行されたのは、明治5年ではなく、明治9年6月のことであり、彼が九州豊津（小倉）を去って上京した後のことであった。

ところで、上記の古賀論文でも、ファン・カステールが、いつ来日したかは不明であり、また来日後の豊津時代以外の活動についても詳細なことはわからない。だが、前掲の橋本『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』では、オランダでの現地調査を踏まえて関係史料を蒐集分析し、ファン・カステールの来日以降における活動の履歴を、より具体的に明らかにしている。

- (8) 『学室要論』及び『教師必読』において、原著者の序文に先だって掲げられた刊行元である文部省による出版案内の文章である。
- (9) ファン・カステールは、『学室要論』『教師必読』の他にも、アメリカ人ページの教育書「“Theory and practice of teaching”, 1847」も翻訳しており、同書は『彼日氏教授論』という表題で、明治9年12月に文部省から出版された。
- (10) ファン・カステールに関しては、稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』（福村書店、1956年）において、「そもそもカステールについては、これらの訳書の序文に『荷蘭人ファンカステール氏来テ都下ニ寓シ和英両語ニ通ズルヲ以テ嘱シテ此書ヲ訳セシム』（『学室要論』大井鎌吉識）とある以外、詳細を知ることが出来ない」（同書、243頁）と記されていた。だが、その後、前掲のユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』（小学館、1975年）が刊行されるに及んで、これを基本史料とした佐藤秀夫「解題 教師必読 ファンカステール」（『近代日本教科書教授法資料集成』第1巻所収、東京書籍、1982年）、あるいは唐澤富太郎「ファン・カステール」（唐澤富太郎編『図説教育人物事典』上巻所収、ぎょうせい、1984年）などが発表され、彼の履歴や活動の概略が紹介された。その後、現地調査を踏まえてファン・カステールの学歴や職歴、来日後の活動などの詳細を明ら

かにしたのは、前述のごとく橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』であった。

ところがファン・カステールの翻訳した日本語の校訂を文部省から委嘱された虎三郎に関しては不問に付され、代表的な先行研究である山本有三『米百俵』（新潮社、1943年）あるいは松本健一『われに万古の心あり—幕末藩士小林虎三郎』（新潮社、1992年）においても全く看過されてきた。

- (11) 米人ジョハン、エス、ハート著『学室要論』（文部省刊行、1876年）の文部省による発刊序文（執筆は大井鎌吉）。なお、同翻訳書は四六判の洋装活字印刷本で、521頁の分量。
- (12) 同上、『学室要論』に収載された原著者の日本語訳された序文「学室要論原序」。
- (13) 同上書、1頁。なお、原書における当該部分は、次のような英文である。

I . WHAT IS TEACHING

In the first place, teaching is not simply telling. A class may be told a thing twenty times over, and yet not know it. Talking to a class is not necessarily teaching. I have known many teaching who were brimful of information, and were good talkers, and who discoursed to their class with ready utterance a large part of the time allotted to instruction; yet an examination of their classes showed little advancement in knowledge.

- (14) 同上書、515頁。原書における当該部分は、次のような英文である。

To educate is, in the first place, to develop. It is to draw out and strengthen the powers and give them right direction. It is therefore, something more than merely imparting knowledge. Knowledge is to the child's mind what food is to the body. Each is a means to an end. It is to cause growth.

- (15) 同上書、521頁。原書における当該部分は、次のような英文である。

Education is developing, in due order and proportion, whatever is good and desirable in human nature.

- (16) 吉田熊次『本邦教育史概説』（目黒書店、1922年）、312頁。
- (17) 稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』は、創元社から1944年に出版された。だが、同書は、その後の1956年には、増補改訂版が福村書店から再版された。本書は初版を参照した。
- (18) 同上書、241頁。
- (19) 福沢諭吉『福翁自伝』（明治32年、1899年刊、岩波文庫版、102頁）。
- (20) 平松秋夫『明治時代における小学校教授法の研究』（理想社、1975年）、48－49頁。
- (21) 米人チャールス、ノルゼント著『教師必読』は、ファン・カステール訳、小林虎三郎校訂で、文部省から1876年に刊行された。四六判の洋装活字印刷本で、562頁。
- (22) 前掲、橋本『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』の46頁を参照。
- (23) 前掲『教師必読』に所収の「チャーチャルス、アシスタント教師必読原序」。原書の英文は次の通りである。

PREFACE.

This volume owes its existence, in part at least, to a request from a friend of the author to furnish advice and hints on one or two points connected with teaching. In complying with the request, it occurred to the writer that a series of familiar letters in reference to school duties and school exercises might prove beneficial to many. The idea has resulted in the preparation of this book, which is presented to the public, and particularly to teachers, with the hope that it may prove both acceptable and useful. The several letters have been written with special regard to the wants and wishes of those whose experience has been quite limited and brief. They embody such views

and contain such suggestions as a long and varied experience in teaching has commended to the author as valuable.

It is not offered as a perfect guide to teaching, nor as a work whose hints and methods may be adopted under all circumstances, for no teacher should be a servile imitator or an exact copyist. It is hoped, however, that as a suggestive work it may accomplish somewhat for the class for whom it is prepared; and if it shall tend to awaken in the mind of any teacher more exalted views of his calling, or impart more correct ideas of school management and school instruction, it will not have been written in vain. Such as it is, the author commends it to the kindly consideration of teachers, assuring them that his heart is in full sympathy with them in their efforts to discipline and instruct the youth intrusted to their charge. Engaged in a noble work, may they earnestly and constantly seek for higher and better qualifications, so that they may prove honorable and honored members of a profession of no mean importance.

NEW BRITAIN, CT., June, 1859.

- (24) 同上『教師必読』所収の「教師必読目録」。なお、翻訳の仕方を知る参考として、原著書の英文目録を、原著書から添付した。
- (25) 前掲、吉田熊次『日本教育史概説』、314頁。
- (26) 前掲、稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』、225頁。
- (27) 同上、稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』、225頁。
- (28) 前掲、平松秋夫『明治時代における小学校教授法の研究』、49頁。
- (29) 唐澤富太郎編『図説教育人物事典』（上巻、ぎょうせい、1984年）の「ファン・カステール」についての解説（同書、646-647頁）。

なお、前掲の橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』において、「ファン・カステールは来日してから死亡するまでの約八年間に、以下の十一冊の翻訳を行っている」（174頁）と記し、その中に「⑤明治九年七月刊 『童女筌』巻之一 文部省 和蘭ファン、カステール訳 村山徳淳・小林病翁校」「⑦明治十年一月刊 『童女筌』巻之二 文部省 和蘭ファ

ン、カステレーン訳 小林病翁校」と、別個の翻訳業績として紹介されている。だが、『童女箏』というイギリスの女兒教育書が、どのような内容であるのかという点については、全く触れられていない（同書、174頁を参照）。

(30) 英国人ヴァレンタイン著『童女箏』（全2巻）は、文部省から上巻が明治9年（1876）7月に、第2巻が明治10年1月に刊行された。

(31) 同上『童女箏』上巻、3－4頁。

(32) 『日本近代教育史事典』（平凡社、1971年）、83頁を参照。

(33) 前掲、平松秋夫『明治時代における小学校教授法の研究』、46頁。

(34) 同上『明治時代における小学校教授法の研究』、46頁。

(35) 同上『明治時代における小学校教授法の研究』、47頁。

(36) 同上『明治時代における小学校教授法の研究』、47頁。

(37) 唐澤富太郎編『明治教育古典叢書 第Ⅱ期 解説』（国書刊行会、1981年）の「序」。

(38) 前掲、山本有三『米百俵』（196頁）に、虎三郎が遺した英単語ノート史料の写真が掲載されている。この史料は、虎三郎が、ある英文原書に出てくる英単語に対応した日本語の意味を、原書に出てくる頁ごとに順次、列記した「英語語彙集」である。

(39) 同上『米百俵』、197頁。

あとがき

本年度、2冊目となる坂本保富研究室の『平成19年度後期 研究報告書』（通巻第7号）を刊行することができました。本号に収載した論文「明治初期における欧米翻訳教育書の校訂活動－日本近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡（Ⅱ）－」は、筆者の長年に亘る「米百俵研究」を纏めた近刊『米百俵の主人公・小林虎三郎－日本近代化と象山門人の教育的軌跡－』（仮題）の一つの章を構成する予定の論文でございます。

本論文は、これまでの「米百俵」あるいはその主人公である「小林虎三郎」についての研究では、全く看過されてきた歴史的な事実を発掘したものです。すなわち虎三郎は、明治3年（1870）に誕生した美談「米百俵」の翌年、郷里長岡を離れて上京しました。以後、彼は、東京の実弟宅に寓居して、日本近代化に関わる学究的活動を展開して晩年を送りました。その10年に満たない東京在住の期間に、彼は、幾つもの日本の教育近代化に関わる国家的規模での業績を遺すことになるわけですが、その一つに「明治初期における欧米翻訳教育書の校訂活動」がありました。

明治初期の日本近代化の端緒には、欧米先進諸国の学術文化が積極的に翻訳・紹介されましたが、富国強兵・殖産興業の人的基礎をなす国民形成という教育の領域においても、文部省主導により欧米先進諸国の教育書が翻訳・紹介されました。最初に翻訳・紹介されたのがアメリカの実践的内容の教育書でした。すなわち、オランダ人の御雇い教師ファン・カステール（1843－1878）が翻訳した『学室要論』であり『教師必読』でした。これらについては、従来の教育史研究でも周知の事実でした。だが、外国人が翻訳した日本語を、明治初期の学校教師たちが理解しやすい日本文に校訂したのは、何と「米百俵」の主人公の虎三郎でした。この歴史的な事実が、全く知られてはこなかったのです。そのような虎三郎の、明治初期における一連の欧米翻訳教育書の校訂活動の実際を解明し、その歴史的な意義を考究することが、本論文の研究課題でした。御高覧を賜り御叱正を頂ければ幸甚に存じます。

本論文を執筆するに際して、筆者は『学室要論』や『教師必読』の翻訳版は私蔵

おりましたが、残念ながら英文原書の方は蔵しておりませんでした。入手困難な、それらの英文原書を実際に手にとって、虎三郎校訂の翻訳書と内容的な比較校合ができたのは、信州大学附属図書館の職員各位のお陰でした。探し求めて他大学から借り受けてくれたのです。ここに記して感謝の意を表します。しかし、イギリスの女子教育書『童女荃』の英文原書（“GIRLS OWN BOOK OF AMUSEMENT”，1873）だけは、八方手を尽くしましたが、日本国内で探し求めることができず、手に取ることができませんでした。今後に残された課題ですが、所在を御教示頂ける方がおられたなら幸いに存じます。

なお、本号は、「日本近代化と米百俵の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡」の（Ⅱ）ですが、その続編となる（Ⅲ）以降も、すでに草稿は書き上げておりますので、著書にする前に、順次、「研究報告書」に纏めて発表して参りたいと思っております。

平成20年2月3日

信州大学の研究室にて 坂本保富